

門遠13
號890
卷



そまや海を大まひのほめまひりし
あつとまふまひりしといひまふあま
まのまきけんあまにあまふあま
まふまといひまふまふまふまふま
まふまをまふまふまふまふま
まふまふまふまふまふまふま
まふまふまふまふまふまふま
まふまふまふまふまふまふま
まふまふまふまふまふまふま
まふまふまふまふまふまふま

鹿の巻

明治三六年
十二月八日
購



かつらぎのしほりまきやげんまよのち
 すくふ三佛生のきんきりあまの影がしほ
 りゆこのたまをいひ麻がすむとありあま
 よをうらた大和鈴原古山師をいひあま
 ちきりごとく、そなたがゆひそらあまのしほ
 筆きりまはえん

麻の海き筆無目録

第一目録

- 初 どんきりやや女
 - 二 五人うしぎ
 - 三 せりぬのけいこ
 - 四 いありあまとうまをれ
- 第二目録
- 一 筆屋の志由まや
 - 二 にせぬしほ
 - 三 同二ぎし目
 - 四 夢中のうみよし

五 火の見ゆくのふく
六 松本屋上狂歌
七 いづやちうむら

第四日録

一 北と南くららのらくらき
二 沙多観音松の狂歌
三 さうい町ちのうらむ
四 ニくづ
五 西月のおしき
六 北の年のけんくま
七 むそうのうみそとみ

八 やほのかけお
九 吉原のひまを
十 佛事・いん
十一 吉原酒の行末
十二 きよつねのうらむ

第五日録

一 くどくの念佛
二 きりぬやうこのあゆ
三 くまのあそび
四 代あゆむ
五 ちやうぐやのうらむ

六 初日の大さくまひ
七 りんごんのぞみちうひ

中五目録

- 一 めれのたぐまう
- 二 申金の酒
- 三 くさりあがは節
- 四 ぢくが孝詣状
- 五 作務りあるり
- 六 新の盆取具
- 七 あみしぬのこやうし
- 八 志むるを史本の日記
- 九 心むるハ我物

麻のたきし奉り奉る

せんごうやあ

渉多新寺所ふを六のぢんさくとうちとほく
 百めいじんの細工くあう江戸中あまねあ
 らゆものも何れうけささふようてあまね
 四五人あうてうあふくら一各をぢんやあ
 法きうさくうらあぬのありふは井をきうて
 とうおほくろあま竹のあどのあふんハぢん
 たいせんあまうまれちや人の竹の子をぬき
 てきうやせんとあまひてかぢひあま
 てあまふんのまふら竹の子十四本もあま





あふひひささうんやう九枚とつハ九人の志や
とこ志やうに入秘やうさうふよりくかきことあり
く米ハ老人をなまぐるのそのりねのあををかきくとふ
あませてハ人のせんあををきうかきうみまハ人のら
ぬをさう之故ゆハん——のこはゆやうそむ
かやうふはゆへむこ志やうふなうまやとしとれ
いろその時浮日中されけハさやうふいじんあふ志
やうハなをまきうある事—あれハ是年一りとき
ぬか——それ志やうぎふかううかうをあるさう
佛法よてハ^{釈迦}真王ハ志やう^{はた}王の己きハ枚をなけ
きやうれハくせんすた枚ハ九人の志やうと志業

南行ハもん——ゆうげんくせんおんせい——
さればなるとすハ志、そののいかりありせん
おまけハ八十一の日の天のふた天地は六六六
十二万人せん是八十一万の四のち——四天王つむ
とこあハ人々のあきみより志やうぎの學まよる
ほめあひハあうもんお物あ——いものあ——
一むんのまけありありよあう——てま三つめよ入て
金よあるハ是かう志やうの人又ハ志をえんの師くを
んるのふてまかとり——物ま——はり是いけ
とりの人をつふ——は但しさまの學をさうあ
ふあうふひと——金ハ左大臣あとの志——かむ



是よりきりき あけしむ人 せめて志やまの けいのらち
たましくよ 志くはなし 金銀さらたに ついぬさな
いとも桂言も あしうて さまきの書奉 せもまじして
安このは等あへ あなくあり 人の自好 よくあり
どうりも花奉も 志きあつたり

何事もくちらびこ せはあめ

るとなさく せしこさく

さうこそや せし中を家あし せしあられ せしあ

せらぬのせり

過ふし 暮月より竹の影まよふは ありてかをんせふあ
出来ぬきく せまき せらぬのせり

子なりあをるしあまよし せらぬのせり
はらの海もせらぬあ せらぬのせり
せらぬをいふぬくあれ せらぬのせり
夜をけくまぬくあぬり せらぬのせり
まぬくのたぬをいふ せらぬのせり
あしひん せらぬのせり
いそとげすひころこあ せらぬのせり
くわやあし せらぬのせり
あまみんをせらぬ せらぬのせり
こあせり せらぬのせり



せいおし不のそめいしとらちのそめいし
けのおおのあさふあふの海はあつといふ
おとしはあつしうまをわとなくたちとあ
ともふうあつたれがまゆくあぢうまをい
まけたい前をさしそみけゆくまににわ
うさをさきとけさあき記けがさうと
おろくあ一人たりそちうふと云いあ
えんのやうあつたがあまのあふをふあ
よりあつてみゆこといわれてあ
あしど

田舎者のどうとせ

とそつ町を白くしとらちの男きうてあ
らみむらひちまのあぢうまをい
るぞとあつていふたりわつま
名をあつとあつたれは
とあまはあつたれま
いふくやそれぞあ
たうくとあつたれま
さうとあつたれま
せあつたれま
名もあつたれま

くそさなハむらひの上下やとふまのどや者助
のりやでりうふまのどもあつてもさをもおどや不
とりといふやそれだハごさぬさなハかや
まをこのつことごふそれでもごさぬまるとま
つくさすりまのどやとよ今あつてはけ
伊賀屋のへさつとごさぬそれとごさ
たつてさす

鹿の巻管第ニ

筆管の巻管

とそり町ふまのりや〜筆管の巻管とのた
ことり〜十四五あるまのどくさつりけふおの
れのとりの目よ長者にあらぬま〜とさ
とふ長者さつて海とふちや〜まらとふら
ごさぬま〜とさつとさつとさつとさつとさつと
ごさぬとさつとさつとさつとさつとさつと
ハ〜とさつとさつとさつとさつとさつと
れとのつこのまらふらけり〜とさつとさつと
のとれこのまらふらとさつとさつとさつと



よりまづーおれも長吉といはれぬとてたん
なのみくまうとつけられしそあこの名ハつぎのぶ
とほけつとてりくぬーふるまうころハ御を次信
とぞ付あはるさてまわハ御をつぎのぶとつけ
ましことくまのとれうまぬてさてくまん
やうつかつきのぶにおれがしあふさかきあはた
あせつぎのぶとつけこととせんーおれはつらさく
まうまひてさてくまあおろろのまをとり
ーゆるあまの大海ふいられまーこころに
次信とはまうことよー

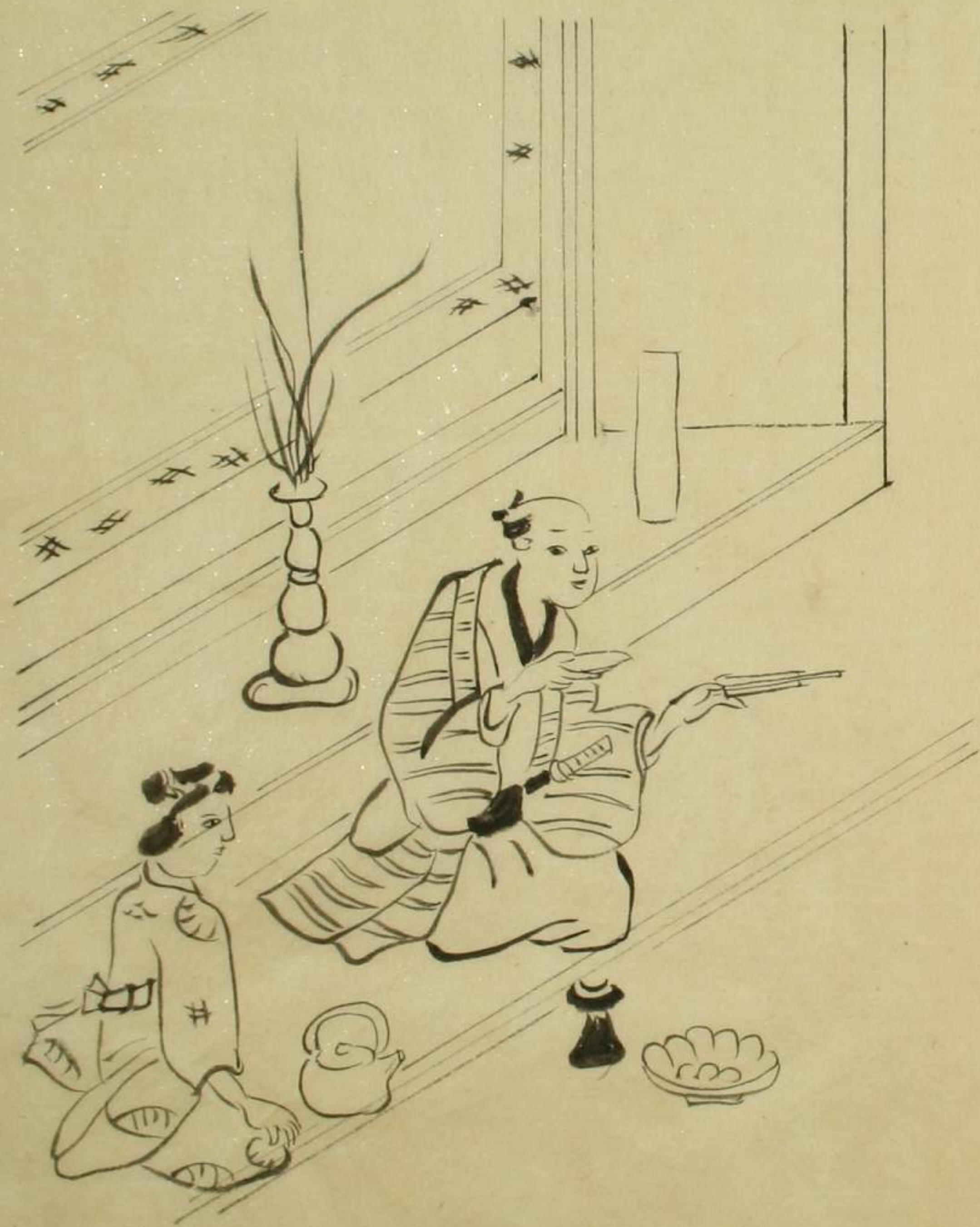
にせぬー海

考つばのとー極月廿八日火の志がんあまの
せうー登がまさとあーくまの御が申しひとくま
ーくたつぬまふら十四日のせうーやふくれあま
あるとーまうとれがなせうーあまのまうま
とわひる二年つまふ病死せられけるはあまの子
ありんをさす御を御ま子ふ新市
人らんれまきりやーのまのあまのあやのあまをとり
みまだ大らふとせぬをあまのまのまら
之御の御ま子まらあまのまらまら
に御のりまじあまのまらまらまら
随分りまじあまのまらまらまら

元禄十二年
永代橋

そのおととしのふとふとらりてえんとふとふと
ヤケるハせうと金ガ子とふりりいふもとつてにあ
ましたとかせぎりせまきくえぬとそれなるを
しと者ときぞん町とごみか町岩屋飯左山
本橋所つきおとろふととかきうふりてくの時も
又そのときと知り町江戸橋小畑町並崎所れいん橋大
とくしとてふ所とら町本所とふ橋とをくしり
は多と名かんぶしんをうりうりく福ふ毎日あると
ととふけとといふのちくちく極月在八百ふい
とや正月とちうしとてりく下りもみぬよりあて
本所とふくしんまでゆき買の時ふふ大橋ふきて

つち^{すじ}あまのあま^すくしとこれとおとふとあま
や火のすとりて天よくろ雲まらふとふとふと
とおとひのさとふとあまのちうふとあまといふ
てあつけと一とんじとけきともしもやとふと橋
あつと一めんまふらふとけりけてそれとも
しとれどもふてきのとあまれがやうしとあまらうね所
と夕暮るよかよのとれちり魚の饒おあつと
こつてゆくとそれをあまのびりてつちあまの橋つ
いとちうふのちうふとてふとてふとあまといふ
いたてあまがなふとてつとあまのづきとてふと
ふとせむとてのちうふとてふとてあまといふ



海に新五郎と云ふともあはるるにみけのびりり
かろおろから我しがさるるもあはるるふあまぎふれ
いせやまづ繞らるる雨んとて家居所あつたそり
かゝりて新五郎あへるその夜ふこやをぞと
ふりあふされども是の三市を海にさすさす
きのつたつたは兒三市と海に新くとちうし
る人あふ今まておそふふんへ何れ新くとた
新んとあまの所ふふ入りてむむむむとあ
海ふつたあけがむしあふふりりちとてお
れまゝと大屋へ申きてこのよをうらあふ
もいおひてあふをまゝあふふと海に

新れはうちすそ、おれしと大屋あはるるもふ
ふらねてこぎに知られくたつねしととくぞ
くらのゆきこめ^羊や^{はな}おれあてりふり所やけ
しとけふも小洞所とてあてあまふり所やけ
らま世の堺町あはるるのくはあ物所とがとちをれど
さふとく所はそんを海にあまのやとおとあをれど
あふ町見り申く急のちふとてりあふりね所ま
ぬまどれはるるのちねあはるるさふくらしてあ
人のおろれはさふらふをれともみ急らうすま
ととふものとしておけまら火の海をうとして
の相違むらりあり四市と海にちとちかたつね

あれぐうーとろく名をよひてと誓とおとひ交元ふ
さとしをまねせうと登が子見の三帝を信ハおとさぬ
うとむをふよめて通うるかろろろ所ふ四帝を信
り移とまて土手の信とろともふたぞとてそハとまね
とる四帝を信見のこ急とまてようもふもそらふうまう
登けえいとをのりこ急といりふけりとしまこまふ
と〜とや〜と帝を信や〜と我身のまのいぼす
名まきぬふそくさるるわ大座信ハまめぬるこらめけ
がむ〜せぬうといふあひぶる大座とろともよ是いと
いひてま〜所の繞こやよりや戸一枚とろとちて帝
を信をうきのせてまきハ四帝を信かき福ハ母子おふ
帝さういあひ〜と大座信ハのまもまきふ〜とて
繞こや〜といをま〜

二五回

昔神不繞こやゆめ〜と名まぬより〜と名ま
〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜
けが〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜
〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜
は身四帝を信見よ〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜
〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜
よめんての〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜
ついにた〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜とま〜





とあるらんらん口へおれれが又りのつらつらきんさの
まきふりくるさんおはまめ故志んたにとうそくう
とおとひにくもみくー又もんらんあめとめち
むらけおどしけまがらる人いふしけうきり
まきまらんふといわれ

ふのらん海くらみふて

いあつとよんてくれま江戸ん物のおめあまし
まが海魚しとるけりまらるがまのんやうとをんし
まの云ひけしめうまあえりてまおぶひーくもつ
んさ直とりまそをららふとりよんかまらるれ
か作まふあねとに天おくらうくとしよとてはなう

すまもとのようするまのやまをなまよりうんあ
うふ太鞍があらねふかみありれ下座なごとし

松本尾上り狂言

尾上とよあけらふそお色しるはふし一お月鞠の
こまゆきまはらおまうゆしうましゆきまも
くの友どおまらうやんるま今日尾上方へまある
まきまうとりまじりやまおむらよまままはぬ
くらいあがりまが花代もあがるらぬまのまお
やうの方へあつてたへとし狂言を書てま

花代もまおあまがこちのや

尾上のうねまとしめあられ

麻の葉と羊子と

太鞍屋から行く前に

過す春の江中村名少市新芝居とりたてまふうな
かまう〜〜のそとんとあまひたいたいこゆんらの海と
うきにそのそまうこればかりあやうきものまう〜

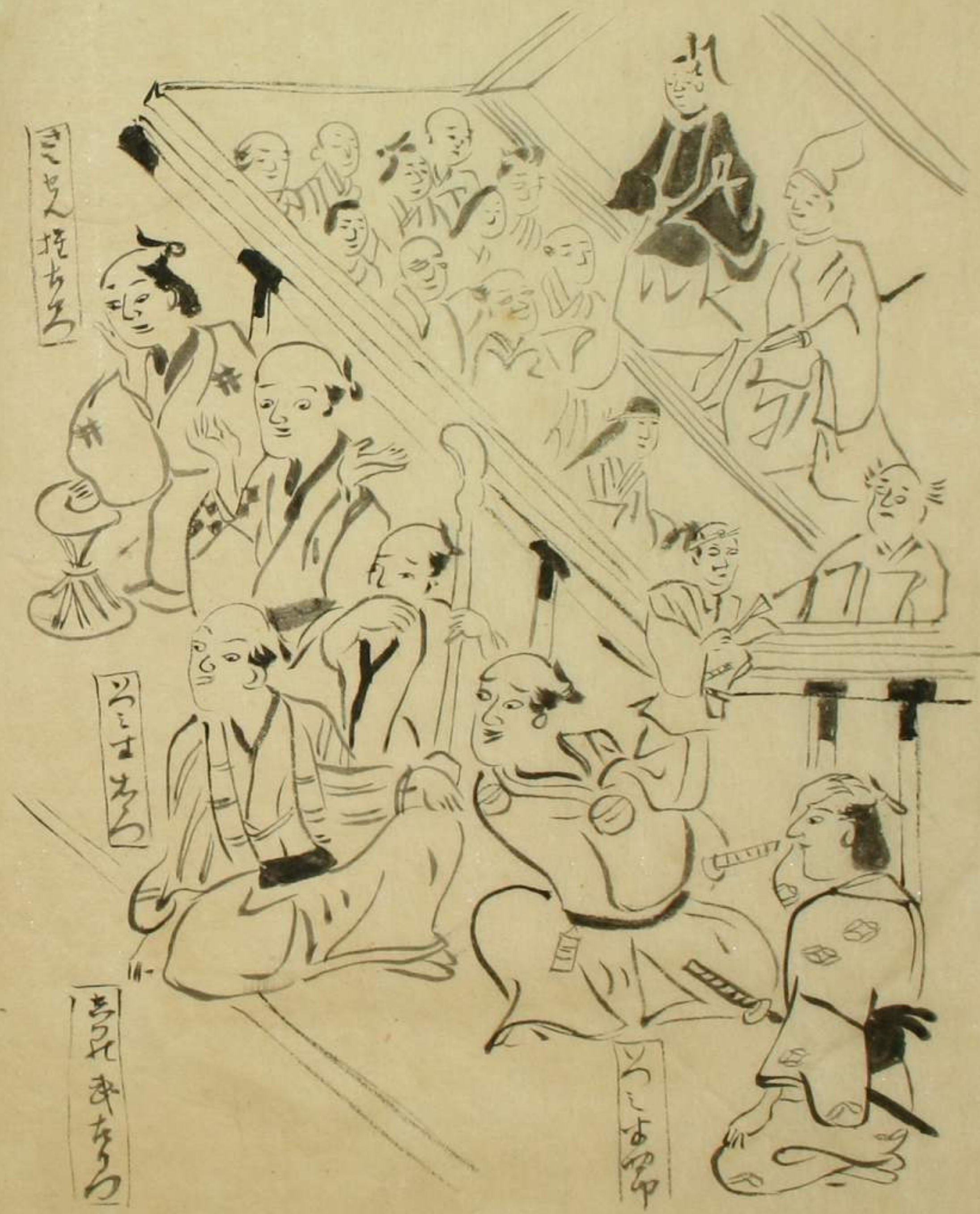
新芝居のおまて少おまのほ〜をせ〜

うそやうちうま魚とのあ〜ら〜

かくをまうう舟をれが若少市きあ〜あまひ〜
そのあを〜人のま〜をま〜りねがま〜う〜あ〜

うち海をすたいたこやらのま〜のう〜

そのあ〜〜〜もええ〜人〜ぬ



ついでふきむいほみれしとちり

淡多観音橋の狂言

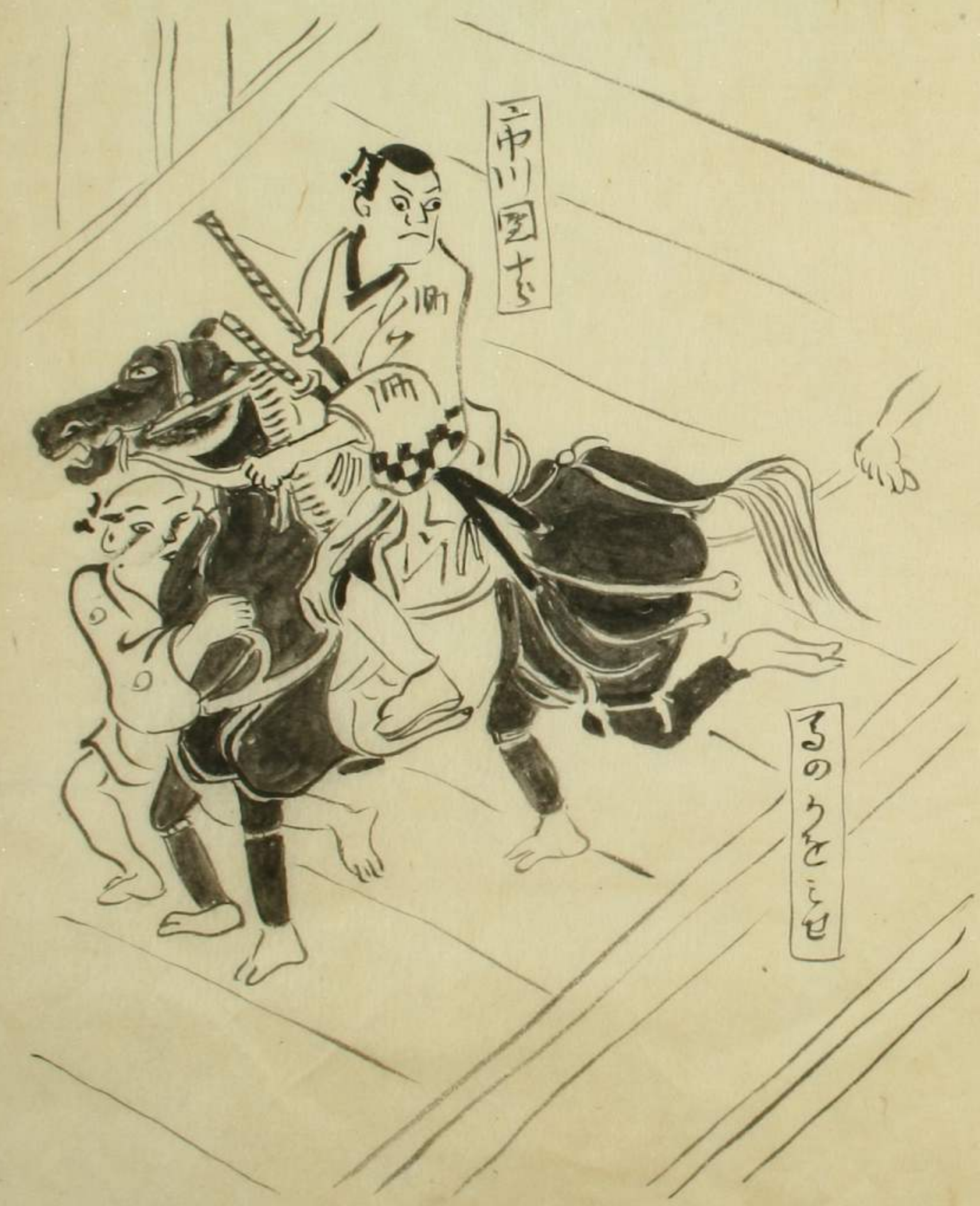
四方のそしきせのとりあせがまこしきよとちりあつり
えしり春をえり海もともあひてはしもむくひもあき
くさのくまんせきんうとつぐまにめその寺に梅花
のさつらあれがけんぶりのきせん神をうつす様といら
ぬきあつらむせぬのまぬく福あれしあひやらん
まわむしうとあまひぶたちぶらてんれがあふふよ
あまたたはくしあつらあつらぶくせぬののあねま
ともはは海しりの人あやまたこちりつれども
あつらきをゆい海さしり利是の花をおしり

了をとる何氏何の狂言しつら寺の名を
きん市がちりうあんとヤ

二世うけいあきしつれよちりうあし
海うきハ人よちきしつれしとや

堺町馬のわねみせ

市村志むいしき二品目よりあつら跡履甚五つ場と
云役者まこしき米うしりまきみたせとちりうあつと
りとあつらちま金庫もあきをそこなれはとちりうあつと
者よあつらしとちりうあつらあつらあつら行し無
ち史とちりうあつらあつらあつらあつらあつらあつら
あつらとちりうあつらあつらあつらあつらあつらあつら



諸よりとまおと一おとらあさうちと一して七回いん
やうことむらういひつけきふなまうとあひ
おちうけきば作めちうそと我があらんおき
りまめつるふ目おなひせ海いといふ

正筆のげんくを懐

五十嵐勅解由としてまよきろく人あつされとも
いあるまにらむらそおさうらうの礼志あま
いふ時よ作田といふ男げんくを懐とつふたんを七
世筆我もなまらあれが急よりきておきろくおげゆ
懐をとりにんまにあともうらとりまておきけり花と
悪りまといといふよけか海いれと云海の上ま松

の校とやよあやうきをひきこる所をつきてあう
まうりさくまんのあせくうと云所なりまう男不
ねたくゆきまげんをもちてはれたあがりてい
ところまうまう作田よまふよめぬがととつてま
れけんをなまらといふたん眼まあんでおあお
ろふふとらうらんよ海いといふれ

むそうのよみそこあひ

神田大工町ふ大黒屋長い海とてあまひおわあうあ
正月朔の夜むきうとつんきうことあふ長い海との
いまひまう人あれが急よりけをまうとつてす二
のひま時をまがふとれが急より海いといふ



まうてりつ、あんどーあまうあまやあまうあま
 ぼいどあまうあまあまあまあまあまあまあまあま
 あまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 とうねあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 店よあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 ずあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 かくあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 かくあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 はあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 △あまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 とうのあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

まあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 かくあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 ことあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 かくあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 かくあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 かくあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

大こくおじんほろかたがたうれて

かくあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

とうれあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 かくあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 かくあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 かくあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 かくあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 かくあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

まのくぐいあきあさう那

とくつと云むそらそんを長し海がりのをいひ
あをほろよあきつるあまよきさる申す海へ目あな
ゆめしたんぶらよりきりみきあどまきくさるめく
いまおちりだめとこらへ道新ふたけるそらうら
きううてまらとまきいあ目あなさううら
とくたんきくそらうつらちちらめく海ゆそ
ひそめけまがていあ目いんうとらぶらりのそらうら
はゆめ目あなゆらまきくよまきれよまきらあらと
いふ松田さよらあらとらうらとちちらまきくさ
そらうらあまきれ海ゆいんぶらまきあさうら

と云ゆめがなが目あさうらうらとくい

おほのあな海とあ

さほあうらんさうら町あさうらみけれがかけまをわ
くはまよかこらあまきまらくはあまき月ようあし
まきまきくあまきくそれく花あとあまきはま
とまゆいあれがうあれがゆらニまあこのせん
まらよいけらまきくともひらあまきまらうら
くうよあさとくにま海ふあれがはいまきま
のそらうらあまきくあまきくあまきくのうらま
といてたまよとく海うらあまきくそせうや
けらまそめおせうがうらまきくあまきくまきく

あうもみゆらひくゝなふともまのどくへりなます
うあまれ祓がくくまさんむそりきまうきめしむ
んもあされてくごさ水ほれといまぬい

吉原ひなあそび

吉原の上りよあとしひくゝあやうこのむさめめめ
白ありとてひなをとおくられけふふそのゆふうとめ
志げくくろく二日の日やういひひひひひひひひひひ
上りあうてぎうきよびて中されたるはたいきよ
からんまゆ町へち何をも志ほひひひひひひひひひ
とてのくせうちのむさめ子くあくしたくと金子
を分あけくごけくくくくくくくくくくくくくくく

のわつとやを前くく行てりの金子あけかてらふ
てもは合よる合てく形を下されといふを分なうく
是よとやあくくあひいそくきよそくくくくくくく
うけをくくくく歩をを所まけゆきてきくくくく
あひよやうありきあけてとんあんどらよまみんき
やうくとあひひてこれが小坊主からくりあてあひ
くああり是ふあうあうとてあちくちあひひひひ
はあらが町のきらひひあふふよのそよされといふ
漢よおとひひつけあんど葉ひひひひひひひひひひ
そとてあををあていふく形をつらとて
きうそくくくくくくくくくくくくくくくくくく



人形がやーいー

仏ののろい

志をひびや町ふ大和を名古とやてまこびる人
あり洋ぶまふまをまけらふはのふごま
神がひまきつれまらさーむせうく仏を
いされたるさうい所は位せらうく和泉氏の何じ
ふくわんこらるうーか仏ののろい人
くろみひーかやむ所は志をふがまんちうと
名おやうーしを海き急のまきよつめてよまたん
ざくさうれー

あちひら志をふかまれと源えき

おあーあー水のいぶのまんちよ

又酒一とくはまたんさくあり

まやうど酒をどくとはを海しれ

あんま新酒をまてあんらん

あやうくたかくまういひあーげま大和屋
うおのよふり氏の何うをよびては海奇跡か
まてあれといふ二首のあをーまを海奇
まけり

西方を志やうまたのまんちうのうち

こまのらうあーせんちーきう那

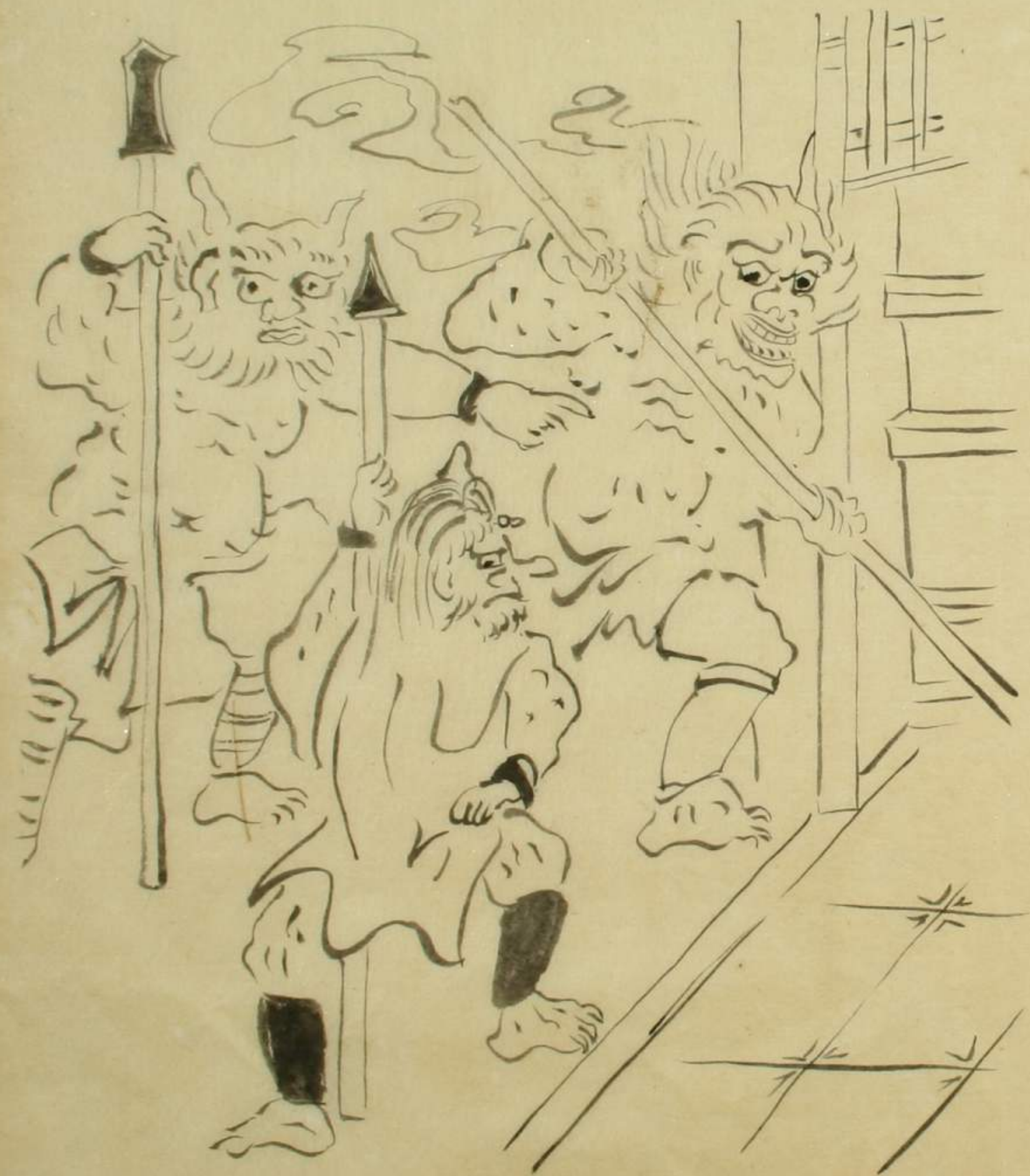
吉原酒の行末

いかにいれさうらふいとてあられと
おんまはるまはるしりしことちやとふふそれ
たのむらうらうらうらうらうらうらうらうら
とらうら

康の生年考

くどくろの念佛

あつちのくどくろの念佛をいへるすこ入又
てかかすすよ入むいじのちてりぬすよつめは福ふ
えうすすつりつりだんぞうあま福ふ九の留す
かやいあまもすやめいどくゆんもみわけん
やきしとていぬさの念佛もやきいするふ六十八
九つてつひよあまあまうらうらうらうらうら
念佛をたよつて馬ふつけちゆくあまふふむち
あつち申さるらぬの述くゆけはふ七十八人
あつち人をまらるこれどもはの男はあま



八五
元階
再三

大じんをちくわのあふのありをもあまらばよりの
あふゆるんとするあふどもとらめけるあいやとあ
らまてもあははみわけをみよふな念佛と云中あ
まよき成あよとてふけつう成あまの道
ろくもくろよ又あさいらき鬼を人かきとやく
あなまらわらまらばにをわらあてとまを
は名もあらあぶるへんあまらう戸をとりあ
らぬころの者せひんんとしむらわらぬーくあ
あまら名をもふみあわらんとわんぬらよそとて
あがくあひなあしあまあまあまらまらりのあ
とらてハせんおじくへあまらまのあふあまらま

みてあまらあまらまらまらまらまらまら
とくくともあまらあまらまらまらまらまらまら
あまららとくくあまらまらまらまらまらまら
あまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
十へんまらまらまらまらまらまらまらまらまら
あまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
あまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
あまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
あまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
あまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
りとして極楽とをさね

あまらまらまらまらまらまらまらまらまら
あまらまらまらまらまらまらまらまらまら
あまらまらまらまらまらまらまらまらまら
あまらまらまらまらまらまらまらまらまら

とらやこらるるをまもむたのふに能くもむしむ
ありのまけまがちうちうちのまのまのまのま
けまのらうくはちまのまのまのまのまのま
とまあきあひまのまのまのまのまのまのま
とらわつれくやくてあまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのま
すまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
てまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まらうまのまのまのまのまのまのまのまのま
づのまのまのまのまのまのまのまのまのま
えんまのまのまのまのまのまのまのまのま

車番七のま事

はしりはま七がところふ大ののりでまけるにあひ
う〜見ゆる米うののりまのまのまのまのま
んまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
いふその中ふよらうまのまのまのまのまのま
あまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
んとてひまのまのまのまのまのまのまのまのま
つけうりまのまのまのまのまのまのまのまのま
ハまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
いふまのまのまのまのまのまのまのまのまのま



昔七でつゝふといふをてあふが志ねんといひて
いやくい昔七よまをまじりて昔京あつてつゆいさ
りらふりかんこくよふあふあつて火がつい
たらとふらんのていへ昔七であつてを名のせい
也い。

代友のかたじけなく

とんとうりなきなるよのなきつとてなまをてふらふよ
ゆきあつてこの外にもらとつちてさむいさうけ
まがゆぶと利くりのよをまわいよまわひひらけ
にうけいよまわいよまわいよあつたてをまわ
せんとよまわいよまわいよあつたてをまわ

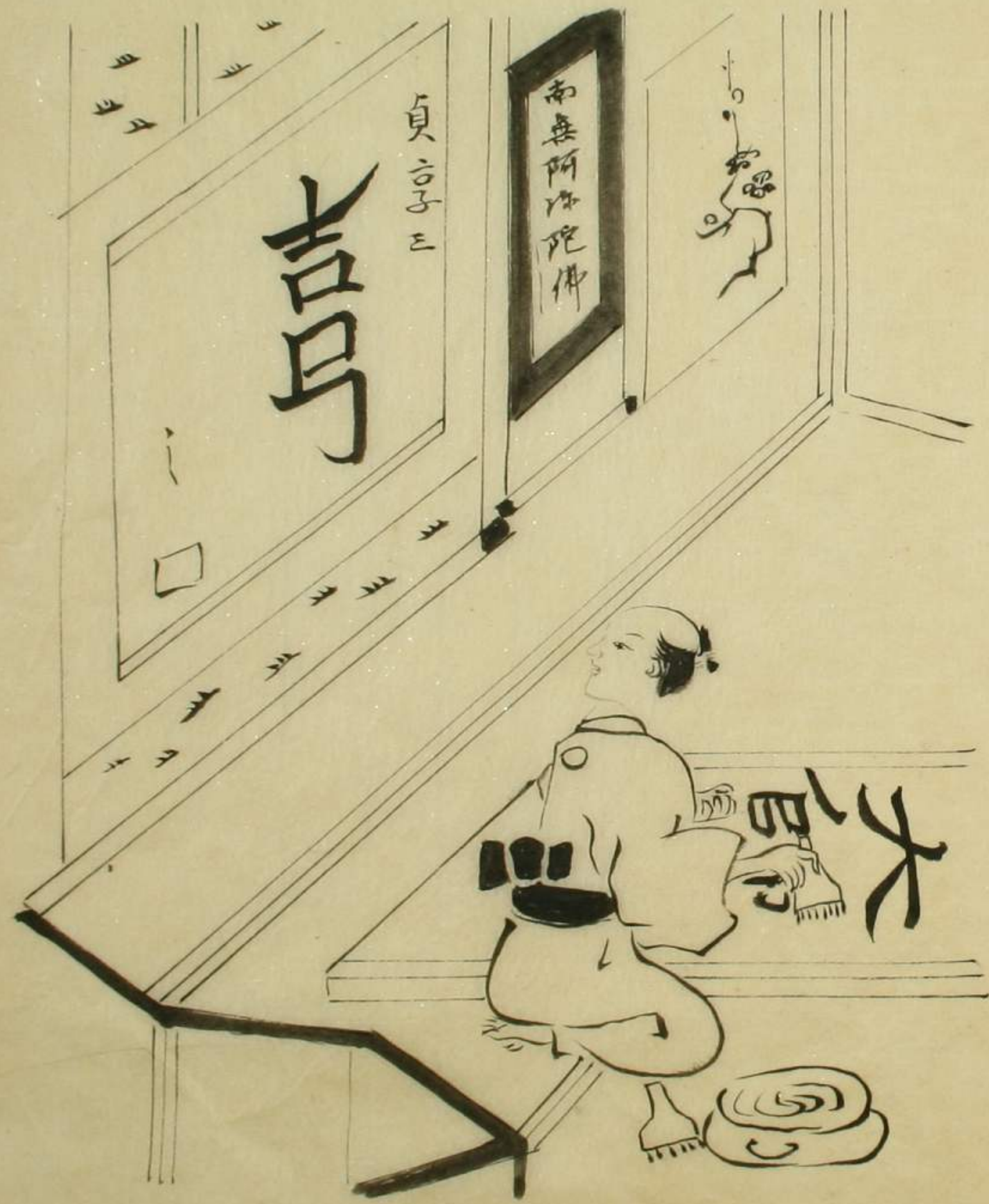
あつたてをまわいよまわいよあつたてをまわ
ゆきあつてこの外にもらとつちてさむいさうけ
まがゆぶと利くりのよをまわいよまわひひらけ
にうけいよまわいよまわいよあつたてをまわ
せんとよまわいよまわいよあつたてをまわ
あつたてをまわいよまわいよあつたてをまわ
ゆきあつてこの外にもらとつちてさむいさうけ
まがゆぶと利くりのよをまわいよまわひひらけ
にうけいよまわいよまわいよあつたてをまわ
せんとよまわいよまわいよあつたてをまわ
あつたてをまわいよまわいよあつたてをまわ
ゆきあつてこの外にもらとつちてさむいさうけ
まがゆぶと利くりのよをまわいよまわひひらけ
にうけいよまわいよまわいよあつたてをまわ
せんとよまわいよまわいよあつたてをまわ
あつたてをまわいよまわいよあつたてをまわ
ゆきあつてこの外にもらとつちてさむいさうけ
まがゆぶと利くりのよをまわいよまわひひらけ
にうけいよまわいよまわいよあつたてをまわ
せんとよまわいよまわいよあつたてをまわ

やれと仰るふ又一人の代官仰るふ八丁御子御印
多物と云ふよりうたぐやれとあつせられた

表具屋の二ノ十帖

予る表具屋の二セヨニ人よりあひてあそひたるふ
むやうぶふまきさるかやのそをんぬが犬とんよ吉馬と
ニ字かきてあつたぬのうらまのあつたぬとんよ吉馬と
あつたぬとんよ一社の人の中それとんよあつたぬと
みられ〜が志よぶ〜とんよとんよとんよとんよとんよ
そんよ〜やそんよ百姓す〜とんよの表具さつたや
の志や〜とんよとんよとんよとんよとんよとんよとんよ
めつた〜とんよとんよ〜とんよとんよとんよとんよとんよ

〜とんよとんよとんよとんよとんよとんよとんよとんよ
またたつたよきゆ〜とんよとんよとんよとんよとんよとんよ
ゆ〜と云一社の人〜とんよとんよとんよとんよとんよとんよ
ら四人の志よぶ〜とおつたぬとんよとんよとんよとんよとんよ
とんよとんよとんよとんよとんよとんよとんよとんよとんよ
よきゆとんよとんよとんよとんよとんよとんよとんよとんよ
まいておきハ吉馬とわら〜とんよとんよとんよとんよとんよ
によびとんよとんよとんよとんよとんよとんよとんよとんよ
かた〜とんよとんよとんよとんよとんよとんよとんよとんよ
〜とんよの始みはつたおと〜とんよとんよとんよとんよとんよ
ハつたよとんよとんよとんよとんよとんよとんよとんよとんよ



昔ハ夫こほいりしゆもゆる程もあつらふよりうわと
いひきぬがかのいふよふしつらもよきふんぢか
くなまらつてつらつたふもゆるをせんといふた
津多つゆきて紙をすくひしんををり十二より
かひきれもつてまゝなるゑんをきつてぬい
のくまをいまやおそしと海あつてつとあつて
にありしとふふ年のまゝの月のまゝの日にせし
あれハ門が目あつてつと海ををりつとつとつと
ごびりつとつとつとつとつとつとつとつと
ちといひつとつとつとつとつとつとつとつと
よふごびりつとつとつとつとつとつとつと

とやけつたはふふもつとつとつとつとつと
ちよふが又とつとつとつとつとつとつと
まてとつとつとつとつとつとつとつと
あひのよきもあつたもあつたもあつたも
いひきれがたつとつとつとつとつとつと
あつてつとつとつとつとつとつとつと
海ひをつとつとつとつとつとつと

かんざんのよみぢり

海をぬつてつとつとつとつとつとつと
入のよきもあつたもあつたもあつたも
つとつとつとつとつとつとつとつと



かかぬ縁ふつむづきあされ海すらふいさぶがあらん
あされ海さぬくころふはたらきゆるきやうあて
のりつと作々まばりやとうむがづむとやてあて
らまゆり海すらふくにかんむんそ海いんといふ
そふまらうまあぢやういん田んそふびつせ
又物回ぬくつむづきと海いせと作付らる
かえゆういんとうちつむづきとゆきてんまはとう
がむのあんむんやう田んあきれてあしら
れ

康の巻集下五

ぬれの巻下

それ天をゆくふくまをゆくあつ地はあらし
とうせが月日のあらしもあらしゆきさうの車の
わぬあらしもあらしのほいせよこをくのぬれ
といひくむしののやをさてらふせぬよ日の本に
そのかゝる田んこいさあつあまのらきも
ういふくせきまのののひらくすらすを
みとのまゝいあらしやう我新ひくせき
あまあまのさるあつとさうこみかりく
さういぬよそのさきより出るまづくがくよとあ



さ
れ
む





かゝ一節ひる女の成る大世の男入こみのう
ち一入たむよもそのまゝかき節いかとおもひ
まゝくはくやうさぶあんぢまぶらよてゆく
にはあをゆいつけよあをさそよひくうとあま
あむさのこ人のよもと海とあつつけあむさあ
つりかのかうをさうあつてはあまをさうか
せ我まえそひうんとてあうりまよひうらるその
時々のあゆやくそくひとのてぬぐひさけをて
ゆわはれ中一とひ入む人あまらきまを
ひまよりのむさうねとつあんとまればが五人
とりつくりわくうこふゆなれがうらうはかせ

りま玉をむおこみたかまをさうかふ
きうゆやのあひまかきうきいめどあうりふち
つくぬれそあそのひまよやくそくのあまを
うこりせむその人うらとびまきたうらうされど
はぐくひきうう申あづむさやむ祓をやうて
こいもすくこらあふぬのくあけたのあまふ
やむさううううまうぬもむあうあひうら
どもまらあふうらとまうのあまうきあひうら
やううがあそのあうをみたまううけうも
あそのまうふあまううのあまうううう
かくあううま玉をさううてうのあまうう

ういさゆ〜つゝは身ふけ〜女房よせしむ
と金おひ返しあつくと大目ともあつ

く〜らあぢ

はらら上方よりあぢをニつ〜〜〜海ら
がまらあぢまらるはまよあつととられとら
海らあぢまらとと〜とらとらとらとら
りよとあ〜あまよといゆうあまのこのあぢをま
いてはまよあぢすまらとらとらとらとら
とらあぢまらとらとらとらとらとらとら
はらととらとらとらとらとらとらとらとら
りとしていよまらとらとらとらとらとらとら

〜〜〜又〜海らとらとらとらとら
と云はとらとらとらとらとらとらとらとら
ひ〜はまらとらとらとらとらとらとらとら
ららとらとらとらとらとらとらとらとらとら
ゆらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
ま〜らとらとらとらとらとらとらとらとら

だ〜孝法状

何〜とらとらとらとらとらとらとらとら
おんあつとともとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとら



八幡大芥川
照白王大神
春日大社

りかづんけり

いふさうせむ大御うら孝法状をこせといわれ
とけふあそりあるとてふくろのむすめをも
ひて西孝の申きかきむくあしきくせもく
もあそにりゆのそさ記より西孝さ由の志し
に西目ふかりやあしきるも今うりも思ふもよ
のとりあすまふむきめともふくろあぶらばき
まいつ海さ西たいきあつ志くくぶされゆせい
まこくーのも法いぞよあてくぶされませいと
よりまーとさういよまたあつりまふもたしきぶや
不とたのそすす孝法状をとつく西孝さむく
おうきおのいひ御う志めあそふくろもとふたふよ

いふさうのやよのだんあにぐこーあどでまらせら
ぬぬいひぐんぢやとおをひあつとつともむき
めちちるあややらよがおのーも一交よあるまいお
れもたつこいまちやのるて二本からてくいひ
れくそとこといひれい

作義がかこり

菊こんを可二十目よさうろくみんいあつとめをつら
ちふふあふやられかきまかりくろやうよあま
あう記男あれむ名を作義とつけさうつ秘し
かさひをいふさうらよとけまこくかきまはと
ありしよあるとき教よ入く火ありのあまらる

ふりの作新よこよといくむや新よりこれが火の
子すちうくえゆるたんねとこ志ぬととくばを
くさかつこがとくまじや庭がちりいとよたん
あまさかこしぬるをといふよまきのや新より
さうまのさうてい火のまもおびたしりくら
あうまのゆるといふをまて庭をうけあう
あうまのゆるといふをまて庭をうけあう
くらとやとやまたが庭のまがぬあうくとま
ますとくらとま

新の庭とらうま

さう人中けまを世中の諸庭自家庭門戸も

人の新をひやうす人のたのよまあうとやける
をうらうととくぶ人のふりまわむあうとを板あ
りあうけさあうけことしてけさも二和よあうま
さうとしてまらあうあうまらうまきやうあうま
あうてあうあうあうまらうてまらまらまら
とて井もあうあうの庭あうま域の用もあう
とくむその庭ととくぶらうとてあうあう
あうあうととくぶらうとてあうあう
とくむあうの庭あうまらうまらうまらう
とくむあうあうあうの庭あうまらうまらう
はうまあうあうあうあうあうあうあう



まゆあうさふまうり〜はあといふあ〜とら
と名付一冊ふらん〜あまふらん〜あまふらん〜
と板元あうあふあ付あ越あうあ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜とあ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

作者

元禄五年己六月
麻野武右衛門

麻理左筆卷之終

東二堂
柳之子種彦書

